



ダイバーシティ推進室
Diversity Promotion Office

TCU

ダイバーシティ通信 VOL.3

共に学び、共に働き、共に築く



ダイバーシティ推進委員会・室員会議

初めてのオンライン会議を開催しました！

ダイバーシティ推進室では、年に3回、委員会と室員会議を開催しています。各会議では活動内容の策定や各プロジェクトの進捗共有に加え、ダイバーシティに関する意見交換などを行っています。

今期は年度初めに予定していた会議がコロナ禍の影響により延期となったことから、初開催は10月のオンライン会議となりました。初めての試みにスタッフ一同戸惑いながらも、会議資料をデータ化して事前配信するなどの工夫も、当日は3キャンパスを繋いだ活発な意見交換を行うことが出来ました。この開催により、オンライン会議には、キャンパス間の移動が不要となることから、参加率の向上や参加者の負担軽減といったメリットのあることを知ることが出来ました。



3キャンパスオンライン会議

次世代育成 Pj.

12月7日（月）張先生の講演会を開催しました！

「研究者への道のり」～情報工学部情報科学科 張 英夏 准教授～

例年、各キャンパスにて教員と学生のランチ交流会を実施して来ましたが、今年度はコロナ禍の影響により、オンラインでの実施となりました。

今回はダイバーシティ推進室員で、情報工学部の張先生より、同先生も属する画像工学研究室の学生21名を対象に、ご自身の進路選択から研究者になるまでの道のり、そして研究、ワークライフバランスについてお話しいただきました。張先生からは特に進路やキャリアに悩む学生に向け、「やりたいことが明確でない人こそ、進学への価値があるのでは」や「大学院に進学となると不安に思うこともあると思うが、最初はわからなくて当たり前。やっていくうちに、研究が急加速する時期がある。それまではじっと力をつけながら待つ」という話があり、大変参考になったようです。

また、仕事と家庭の両立については「無理に両「立」させようとせず、両「座り」くらいの気持ちで取り組めばいいのではないか」という話があり、学生だけでなく一緒に聞いた教職員も含め、改めて考えさせられる機会となりました。ご講演いただいた張先生をはじめ、ご協力いただきました画像工学研究室の向井先生、学生のみなさん、貴重なお時間をありがとうございました。

就活を始めるみなさんに質問です。

- ・どうしてもこの会社でこの業務がしたい！というのがありますか？20年後も続けられますか？
- ・これは負けない！というのがありますか？
 - ・専門性が高いか？
 - ・実績があるか？
 - ・語学力が高いか？
 - ・課外活動での実績？
- ・情科の魅力は十分味わいましたか？

家庭と仕事の両立

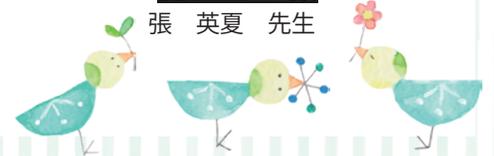
- ・両「立」は無理。目指せ、両「座り」。
- ・無理しない、心病む、ケセラセラ。

掃除は四角くやる必要ない。
丸くやるだけで立派。
百円な価値を丸く掴む

・「結婚」「出産」も選択であって必須ではない。
(個人的には大変だけど最高の癒しです)



張 英夏 先生



ダイバーシティ推進室
Diversity Promotion Office

ダイバーシティ推進室 (世田谷キャンパス 1号館3階)

〒158-8557 東京都世田谷区玉堤

TEL 03-5707-0104 FAX 03-5707-1289

E-mail diversity@tcu.ac.jp

<http://www.diversity.tcu.ac.jp>

https://twitter.com/tcu_sankaku



岡田往子先生と女性活躍推進のあゆみ



2012年より男女共同参画室の初代室長を務められた、岡田往子先生が3月でご定年を迎えられました。原子力研究所での研究の日々、2009年の文部科学省科学技術振興調整費の採択、男女共同参画室の前身である女性研究者支援室の立ち上げ、そして現在のダイバーシティ推進室に至るあゆみについて、お話していただきます。

第2回 「都市大ダイバーシティ～テクノレディと身近なロールモデル～」

1980年女性学生は学部生院生を含め40名程度在籍し、徐々に増えてきました。1985年頃、本学の広報誌では「テクノレディ」と銘打って女性学生を取り上げています。機械工学科の伊東明美先生はテクノレディの表紙を飾ったおひとりです。

1986年に男女雇用機会均等法が施行されたころですから、本学の広報委員会は女性の社会進出への先見の明があったのだと思います。いつ頃まで、テクノレディという言葉が使われていたのか定かではないのですが、定着せず消滅したのは非常に残念です。女性だけを取りあげられることを批判なさる方がいらっしゃいますが、今もまだ、特に工学系の女性はマイナーな存在ですし、ポイントを絞るとというのは一つの戦略ではないでしょうか。さらに、社会が抱えている様々な課題に対しては、常に意識し、地道に継続的に活動していかなければ、それまでの慣習や思い込みは変わっていかないと私は思っています。

さて、女性専門教員は1996年に第一号が武蔵工業大学に誕生します。それが僭越ながら私です。1997年にエネルギー基礎工学科に配属されました。同時に環境情報学部が横浜に設立され、女性教員が大学全体として増加します。

しかし、工学系の女性の専門教員はその9年後の2006年に5名が着任し、やっと身近なロールモデルが複数になりました。前後しますが、2004年に第一回渋谷コロキウムが開催されました。講演者は東洋大学・経済学部助教授（当時）の白石真澄先生と環境情報学部教授（当時）の故 岩男壽美子先生で、そのタイトルが「少子化社会の諸問題と対策～少子化社会をどう乗り切るか～」でした。私はその会場に聴衆として参加し、質問をしたことを覚えています。「少子化対策には女性の働き方の理解が必要ではないでしょうか、女性の働く環境を整えていかなければ子供を産み育てることはできません。」と。これへの応えはだれもが想像するように、「その通りです。」となるのですが、私にはそれ以上の意味がありました。この質問には本学教職員の方々への「本学も環境作りを！」のメッセージを込めたのですが、汲み取っていただけた方はどの程度いらしたか。そのころ、私は2002年に理工学系学協会の呼びかけで創設した学協会男女共同参画連絡会で活動を始めていました。この活動が、振興調整費（後の科学技術人材育成事業）女性研究者育成支援モデル事業の獲得に繋がります。私立の工学系大学で初めて、大きな事業に採択されたのはなぜなのか…次回に続く。



広報誌「テクノレディ」

左：現ダイバーシティ推進室の室長 伊東先生（機械工学科2年）



未来を担う「テクノレディ」たち

* 次回のコラムは3月号掲載の予定です。どうぞお楽しみに！



イクメン連載企画 第1回 ～コロナと育児について

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、多くの大学や企業で「働き方改革」が進みました。本学でも緊急事態宣言後は在宅勤務となり、仕事と家事・育児の両立に苦労した方も多いのではないのでしょうか。

そこで今回はイクメン連載企画の第1回目として、コロナ禍での「育児」をテーマにダイバーシティ推進室の室員でもある【理工学部電気電子通信工学科 鈴木憲史 准教授】に寄稿いただきました。

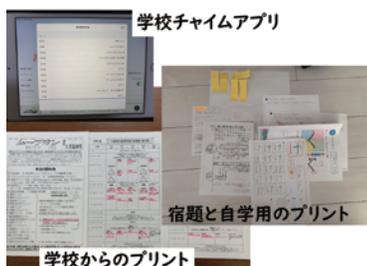


2020年2月、COVID-19の感染が広がり息子たち（小2と年長）の生活は一変し、小学校は3月から一斉休校となり日常が非日常へと変わった。また、3月に次男は、長男の時と違った時短などの制限を受けての修了式を体験した。加えて3月に予定していたスポーツクラブ主催のイベント中止、毎週末の空手道場も活動中止と様々な制限がなされた。

例年なら春休みに学童へ行かない長男を連れて研究室にて勉強を見たりしていたが、今年はできず早めに来た長期休みに共働きの我が家では少々困ったことになった。保育園は3月31日まで登園可だが、小学校はさすがに無理だ。ただ、幸いにも低学年でかつ学童に行っていない児童を対象に3月4月は小学校で「児童預かり」の対応をしてもらえた。また、入学式前の次男も4月1日から児童預かりの対象となり、日中預かってもらえ非常に有り難かった。何だかんだ自宅で作業できる日は自宅で息子たちと過ごし、大学の卒業式や会議の日は小学校と保育園にそれぞれ息子たちを預けて乗り越えた。

小学校の一斉休校解除が見えない中、次男の入学式が4月6日、時短や人数制限のもと行われ、晴れて新1年生となった。普通ならランドセルを背負い、意気揚々と毎朝小学校に向かうはずが、4月7日の首都圏への緊急事態宣言により学校再開の目処は立たず、隔週で宿題を小学校に取りに行く生活になった。大学も在宅勤務へと変わり息子たちと、4月13日からは妻を含めた4人で過ごす引きこもりの幕開けである。

妻は生活リズムを崩さぬためにと、一日のスケジュールを小学校の宿題プリントをもとに作成し、付箋を使ったチェッカーで宿題忘れをなくす試みを行った（写真1・2）。私の方は、アプリを使って家の中に学校チャイムを響かせ、さながら学校を再現した（写真1）。また、小学校は、学校再開を見越してか宿題が少なく、大学教員の性なのか学習への一抹の不安を覚えた。ネットで問題をかき集め、長男には2年生の復習プリント（漢字と掛け算など）を、次男にはひらがな、数字の書き取りと自作の名前練習シートをつくり、宿題と併せて勉強の時間を設けた（写真1）。勿論、毎日ずっと勉強では飽きるのので、息抜きの時間として「一緒にテレビゲーム」、「犬と遊ぶ」、「空手で体を動かす」など取り入れた（写真3）。この間の生活で息子たちは、ストレスを感じることなく、学校再開以降、毎日楽しいと言いながら通っている。



(写真1)



(写真2)



(写真3)



オストメイトって知っていますか？

オストメイトとは、さまざまな病気や障がい、事故などが原因でストーマ（人工肛門・人口膀胱）を腹部に取り付けている人たちのことを指します。
 特殊な機械を付けているわけではなく、排泄物を一時的に受ける「パウチ」と呼ばれる専用の袋をストーマ部位（腹壁に人工的に作る排泄口）に装着しています。
 排泄の仕方は違っても、日常生活はもちろん、学校や仕事、スポーツや旅行なども楽しむことも出来ます。オストメイトの人口は国内でおよそ20万人とされています。

オストメイト対応トイレは普通のトイレと違うの？

駅や病院などの公共機関で、オストメイトための設備があるトイレには、「オストメイトマーク」が付いています。
 オストメイトは、一定時間ごとにパウチの廃棄・交換をしなければなりません。その際、通常のトイレでは対応が難しい作業が必要となります。



オストメイトマーク

オストメイト対応トイレでは、それらの作業を行いやすくするために、ストーマ（パウチ）の交換ができる『汚物流し台』、装着を行うための装具が置ける『カウンター』、ストーマを装着していたあたりの皮膚の洗浄やふき取り、衣服や使用済みの装具の洗浄や廃棄などができる『収納式の着替え台』『シャワー』など様々な設備や機能を備えています。



オストメイト対応トイレ



ストーマを洗浄するための流し台やシャワー機能、カウンター等が備えられています

東京都市大学にもオストメイト対応の多目的トイレがあります！

本学では世田谷キャンパスに5カ所、等々力キャンパスに1カ所設置しています。
 ダイバーシティ推進室のHPの「多目的トイレマップ」で設置場所を確認することが出来ます。
<https://www.diversity.tcu.ac.jp/about/#link02>

わたしたちに協力出来ること…

多目的トイレは基本的にはどなたでも利用が出来ますが、一般トイレを利用できる方が多目的トイレを長時間使うことにより、本来必要としている方が待たされたり、不愉快な思いをしなくてはならないこともあります。
 周囲からの援助や配慮を必要とする人への理解を深め、多機能トイレの設備や機能を真に必要な方が必要な時に利用できるよう、思いやりの心をもった利用を心掛けましょう！

